慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	真言宗御室派総本山仁和寺御所蔵慶長刊本『四書』の研究
Sub Title	A study of "Sishu 四書" typeset and printed in Japan in Keicho(慶長) period (1596-1614) housed in the Ninnaji (仁和寺) Temple in Kyoto, Japan
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2013
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.48 (2013.) ,p.71- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山城喜憲元教授退職記念#挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20130000-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

真言宗御室派総本山仁和寺御所蔵
慶長刊本『四書』の研究

髙橋　智

はじめに
第一章　仁和寺御所蔵について
第二章　慶長刊本について
一　慶長刊趙岐注『孟子』
二　慶長刊『論語集解』
三　慶長刊『大学・中庸章句』
第三章　漢・趙岐注『孟子』について
第四章　魏・何晏集解『論語』について
第五章　宋朱熹章句『大学』『中庸』について
附章　慶長七年清原秀賢刊『古文孝経』について

はじめに

京都、御室の総本山仁和寺を最初に訪れたのは、平成一年に遡る。『孟子』古写本の伝本調査を継続中、既に昭和の半ばころに斯道文庫の阿部隆一教授が調査された漢籍記録に基づいて、同寺御所蔵古写本『孟子』を拝見した。その、薄手の斐紙に本文と訓点を墨書したテキストは、室町時代永禄年間（一五五八～一五六九）の書写に係るものと推定されている。そもそも南宋の朱熹（一一三〇～一二〇〇）が注した『四書（大学・中庸・論語・孟子）集注』が天下に流布する江戸時代より前、中世期

にあって、漢の趙岐が注釈を施した『孟子』の日本古写本は、博士家清原氏の家に伝わるものと、寺院による講習のテキストと二系統に分かれていたが、いずれにしても現存する伝本は数本に限られる、そのうちの一本である貴重な資料である。その成果は、『旧鈔本趙注孟子校記』（斯道文庫論集第二十四輯　平成一年）に記した。

その後、再びの調査を期しながら、荏苒として時を経てしまったが、平成十七年、二十年……と数点ずつの拝閲を重ねるうちに、仁和寺御所蔵の漢籍には幾つかの重要な特徴が秘められているように感じられてきた。しかし、いまだ全貌を知らずしてそれを論じることは差し控えなければならないが、ご厚意を得て拝閲を許された者の責務として、随時調査報告をまとめるべきと考え、ここに、調査によって得た成果の一端を記すこととしたのである。

なお、御所蔵の資料閲覧に際しては、同寺管財課のご高配をいただきましたこと、また、同課の朝川美幸氏にはさまざまなご教示を賜ったこともあわせてここに謝意を表する次第である。

第一章　仁和寺御所蔵について

仁和寺御所蔵の外典漢籍は、既に奈良文化財研究所によって調査されているところであるが、中世期、どのような蔵書を背景に漢籍の講読が行われていたかは定かでない。応仁の乱（一四六七～一四七七）の際に、東軍に焼かれてどれほどの典籍が焼失したかは、想像を絶する。しかし、その後、豊臣秀吉や徳川秀忠の寄進、第二十一世門跡覚深法親王（一五八八～一六四八）の再興により、塔頭寺院も含めた蔵書活動によって、江戸時代の初期には京洛の学問に大いなる貢献をはたしたものと察することができる。その証しが、現在の寺庫に保存される漢籍の群れである。

そもそも古刹の収蔵漢籍で注目されるのは、中国の宋・元時代の刊本や日本で書写された古写本、とりわけ室町時代を遠く遡る時代の典籍であるが、それは、時代の古い宝物というだけではなく、学僧の学問の系譜を明らかにできる意義が含まれるからである。主に、大陸への留学僧が将来した唐本によって、それを書写・校勘・読習・覆刻出版して着実に我が国の書物文

化の基礎を築いた中世期の学僧の果たした役割は、宗教上の発展とともに忘れてはならない大きな意味を持つ。そして彼らのその原動力が、漢籍の蒐集にあったことは、古書の骨董価値よりも更に強調されねばならない要点であると思われる。

かつて、斯道文庫の阿部隆一教授が日本に於ける漢籍古写本の研究を行った際に、調査に及んだリストによって俯瞰してみると、中世期の古い時代の遺物を焼失して、再び興された仁和寺の漢籍の群れには幾つかの特記すべき特徴があり、その特徴をいくつか挙げてみると、一つには室町時代後期の古写本に見るべきものを存するということがある。

『黄山谷詩抄』『周易正義』等は、室町期の学僧によってよく読まれた外典であり、仁和寺本は当時の遺風を伝える良質の写本である。弘治永禄年間（十六世紀半ば）に書写された『論語』『孟子』『中庸』『古文孝経』は、仁和寺の学僧が博士家の点本を借りて写したもので、優れた学統を受け継いでいたことを如実に語る資料である。

次に、江戸時代に入ると中国では明時代、清時代の刊本、日本ではいわゆる和刻本という、京都や江戸の書肆が出版した木版の整版本が中心になるが、漢学を学ぶ上で必要とされる漢籍が、実にバランスよく集められていることがわかり、とりわけ明時代に出版された実用書の上質なものがよく揃っていることは、なみなみな蒐集力で成し遂げられることではない。

『十三経注疏』『百川学海』『文苑英華』等大部の叢書・類書が整えられているところにもその一端が伺われる。

そして、その和刻本の質に於いては、殆どが初刷りの美しい印刷本で、特に江戸時代初期から前期にかけて出版されたものについては、蒐集というよりは出版人がそれぞれ初印本を献上していたのではないかと思われるほどである。

『爾雅注疏』『漢書』『後漢書』等、江戸前期の刊本は、原装でしかも初印の美しい本である。

参考までに、調査に及んだ古写本・唐本・江戸時代刊本を挙げると、以下のようである。

【古写本】

論語十巻　魏何晏集解　単経本　永禄十三年（一五七〇）仁和寺沙門御写本　二冊（称五十八・以下同じ）

孝経一巻　弘治三年（一五五七）仁和寺沙門御写本　一冊

中庸一巻　永禄八年（一五六五）仁和寺沙門御写本　一冊

孟子十四巻　後漢趙岐注　単経本　永禄頃仁和寺沙門御写本　三冊
論語十巻孟子十四巻　宋朱熹集注　単経本　江戸時代初期～前期写　四冊（夜五十九函　二～五）
論語抄　闕名注　カナ交じり　文明七年奥書本　室町末近世初期写　五冊（河七十一函　三十二～三十六）
孝経聞書　闕名撰　カナ交じり　近世初期写　一冊（河七十一函　八十）
周易　存巻一～六（乾～未済）　魏王弼注　慶長頃写　大三冊（李六十三函　五～七）
周易正義十巻　唐孔頴達撰　室町末近世初写　薄葉　大五冊（李六十三函　九～十三）
〔周易私注〕外題周易本卦私記　闕名撰　江戸時代初期写　大一冊（李六十三函　八）
黄山谷〔詩抄〕二〇巻　闕名抄　室町後期写　五冊（始八十六）

【唐本】

十三経注疏　明毛晋校　明崇禎間刊　百二十四冊（果六十一）
文苑英華一千巻　宋李昉等奉勅撰　明隆慶一年（一五六七）胡維新・戚継光刊　百一冊（衣九十三）
百川学海百種百七十九巻　宋左圭編　明末刊後修　清読書坊蔵版　六十四冊（位九十六）
分類補註李太白詩二十五巻首一巻集千家註杜工部詩集二十巻杜工部文集二巻　唐李白・杜甫撰　（李）明楊齊賢・蕭士贇注
明許自昌校　明万暦頃刊（余泗泉）　寛永十二年林羅山本移点　十九冊（官八十三）

【江戸時代刊本】

易経考異・書経考異・詩経考異各一巻　宋王応麟撰　江戸前期刊　大三冊（芥六十七函　1～三）
書経集注十巻　宋蔡沈撰　林羅山点　承応二年刊（大島清因）初印　大十冊（李六十三函　二十九～三十八）
詩経集注八巻　宋朱熹撰　〔寛永〕刊（豊雪斎道伴）　栗皮表紙大八冊（芥六十七函　十二～十九）
毛詩二十巻　漢鄭玄注　寛延二年刊（京、風月荘左衛門　今村八兵衛　丸屋市兵衛）　大五冊（芥六十七函　七～十一）
毛詩品物図考七巻　岡元鳳撰　天明五年刊（京、北村四郎兵衛等）初印　大三冊（芥六十七函　四～六）
儀礼白文十七巻周礼白文不分巻　周哲点　寛永十三年序刊　儀大七冊周大六冊（李六十三函　三十九～五十一）
〔五経〕明翁溥校　明暦二年刊（山形屋）　大六冊（李六十三

函　二十三～二十八）
又　後印　存易経・春秋　明和七年訓点書き入れ　大二冊（李六十三函　十五・十七）
同　存書経上・春秋・礼記　林羅山点　寛文十三年刊　大六冊（李六十三函　十六・十八～二十二）
同　存易経上　後藤点　刊　大一冊（李六十三函　十四）
〔五経集注〕存詩経十五巻　宋朱熹撰〔寛文〕刊　六行大字本　大八冊（芥六十七函　二十～二十七）
首書五経集注　〔松永〕昌易首書　寛文四年刊（〔京〕野田庄右衛門）　初印　五七冊（珍六十二）
大学一巻　宋朱熹章句　江戸中期刊（辻氏）　一冊（河七十一函　四十四）
大学衍義四十三巻首一冊　宋真徳秀撰　明陳仁錫評　江戸前期刊覆刻明崇禎序刊本　二十冊（河七十一函　十二～三十一）
中庸一巻　宋朱熹章句　江戸前期刊　一冊（河七十一函　四十九）
中庸十巻（外題大和中庸・版心倭中庸）　闕名仮名抄　寛文七年刊（書呈風月）　図絵一枚　十冊（河七十一函　三十七～四十六）
中庸原解三巻　大田錦城撰　文政七年刊（江、千鐘房須原屋茂兵衛）　六冊（河七十一函　一～六）
論語十巻　欠巻一～二　宋朱熹集注　林羅山点　江戸中期刊（辻氏）　三冊（河七十一函　九～十一）
論語十巻　存巻六・七　宋朱熹集注　江戸前期刊　一冊（河七十一函　六十）
論語十巻　魏何晏集解　大正五年影印天文二年刊本　二冊（河七十一函　七十七～七十九）
孟子十四巻　存巻十一～十四　宋朱熹集注　寛文九年刊　一冊（河七十一函　五十九）
論語序説鈔・孟子序説鈔　中村惕斎撰か　慶安三年刊（京、武村市兵衛）　三冊（河七十一函　六十四・五十八・五十六）
玄宗御注孝経補義一巻　唐玄宗御撰　福井敬斎（軌）補義　天明八年跋刊（大、吉文字屋市兵衛）篠山藩振徳堂蔵版　一冊（河七十一函　七十三）
同前　一冊（河七十一函　七十三）
同前　一冊（河七十一函　七十四）
同前　一冊（河七十一函　七十五）
同前　一冊（目録外）
孝経一巻　山崎闇斎点　江戸前期刊（京、武村市兵衛）　一冊（目録外）

孝経刊誤　宋朱熹撰　明暦二年刊（京、武村市兵衛）　一冊（河七十一函　四十二）

孝経大義　元熊禾撰　元禄四年刊（武昌　松葉屋清兵衛）一冊（河七十一函　四十六）

爾雅注疏十一巻　晋郭璞注　宋邢昺疏　江戸前期刊　初印　原装　大十一冊（帰百三十五）

又　大十一冊（帰百三十五）

説文解字韻譜五巻　宋徐鉉撰　慶長元和間刊　古活字　翻丙辰

種善堂刊本　大五冊（帰百三十五）

広韻雋五巻　明袁鳴泰撰　江戸中期刊　覆明万暦刊本　原装

大二冊（王百三十六）

史記評林百三十巻首目一巻　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　唐張守節正義　明凌稚隆輯校　李光縉増補　明万暦間建陽熊友于刊　唐大三十九冊（竹百四十一）

史記評林百三十巻首一冊　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　唐張守節正義　明凌稚隆輯校　李光縉増補　天明六年刊寛政四年修（広華堂）八尾版　大二十五冊（白百四十二）

漢書評林百巻首一巻　後漢班固撰　唐顔師古注　明凌稚隆輯校　釈玄朴等点　明暦三年刊（京都、松柏堂林和泉掾）　初印　大五十冊（駒百四十三）

後漢書百二十巻　劉宋范曄撰　唐李賢注　伝釈玄朴点　江戸前期刊　覆元大徳九年寧国路儒学刊本　初印　大六十一冊（食百四十四）

国語二十一巻　呉韋昭注　宋宋庠音　林羅山点　江戸前期刊初印　大十冊（鱗七十三函　六～十五）

孔子家語十巻　魏王肅注　寛永十五年刊（京、風月宗智）早印　大五冊（鱗七十三　一～五）

御覧頒行忠経集注詳解　漢馬融撰　鄭玄注　明余昌年訂　寛文五年刊　二冊（河七十一函　四十六・四十七）

小学二巻　宋朱熹撰　山崎闇斎点　江戸前期刊（京、武村市兵衛・大、同佐兵衛）　二冊（河七十一函　七・八）

小学集注大全十巻　宋朱熹撰　明陳選編　慶安三年刊（京、武村市兵衛）　五冊（河七十一函　四十七・四十二・四十三・四十四・四十五）

同　存巻三～五　一冊（河七十一函　五十）

小学句読口義祥解十三巻　欠巻一・四～七　鼇頭本　宇都宮遯庵撰　延宝八年刊　四冊（河七十一函　五十一～五十四）

通書二巻　宋朱熹撰　寛文六年（鈴木太兵衛刊）　二冊（河七

十一函　七十一～七十二）
五倫書六十二巻　明宣宗朱瞻基撰　小出永庵（立庭）点　寛文八年刊（京、小嶋弥左衛門）　覆明景泰五年（一四五四）北京劉氏翠巖精舎刊本　二十二冊（淡七十二）
六臣注文選六十巻　梁昭明太子蕭統撰　唐李善・呂延世・劉良・張銑・李周翰・呂向注　寛文二年刊（京、八尾勘兵衛・野田庄右衛門）後印（京、玉枝軒植村藤右衛門）　三十一冊（虞百）
詩人玉屑二十一巻　宋魏慶之撰　釈玄恵点　寛永十六年刊（角屋清左衛門）　十冊（皇八十五）

【ほか】

増註唐賢絶句三体詩法三巻　宋周弼撰　元釈円至天隠注　元斐庾増注　明応三年（一四九四）葉巣子（〔相国寺光源〕）刊　初印　三冊（始八十六）
錦繡段鈔五巻　釈天隠龍沢撰　近世初期刊　古活字　仮名交じり　五冊（始八十六）
孝経御注一巻　唐玄宗撰　明治二十四年三条実美影刻三条西家古写本　一冊（河七十一函　七十六）
周易進講手記三巻　三輪希賢・正徳三、四年講義、享保一年成書、仮名交じり、江戸後期転写延享一年資斎・三年慎斎写本半四冊（李六十三函　一～四）

そして、更に注目に値するのが、近世初期に一世を風靡した木活字による印刷本、すなわち慶長から寛永期に出版された古活字版（慶長刊本）の所蔵である。今回、特にここに紹介論じるのは以下の『四書』の所蔵についてである。

孟子十四巻　漢趙岐注　慶長刊　古活字版（下村生蔵か）大四冊（河七十一函　六十七～七十）
中庸一巻　宋朱熹章句　慶長十四年以前刊　古活字版（今関正運）大一冊（河七十一函　四十八）
大学一巻　宋朱熹章句　慶長刊　古活字（今関正運か）大一冊（河七十一函　四十五）
古文孝経一巻　旧題漢孔安国伝　慶長七年刊　古活字版　大一冊（河七十一函　四十三）
論語十巻　魏何晏集解　慶長刊　覆刻古活字版　大二冊（河七十一函　六十一・六十二）
同前　大二冊（目録外一・二）
同前　大二冊（目録外三・四）

同前　　大一冊（目録外五）
孟子十四巻　存巻九～十四　漢趙岐注　慶長刊　覆古活　大二冊（河七十一函　六十五・六十六）

ところで、この頃の古活字版出版活動については、『古活字版の研究』（川瀬一馬著・昭和十二年・安田文庫）に詳しく載せられているが、とりわけ寺院についての言及のなかで注目されるのは、仁和寺の塔頭である心蓮院に於ける開版事業についてであった。その第五章第一節「京洛の寺院に於ける活字開版事業」の「八　心蓮院の開版事業」に『倭玉篇』の慶長活字版を紹介、これが舟橋秀賢の『慶長日件録』（九年五月二十五日）の条目に見えるものを指すのであろうと判断し、即ちこれが心蓮院の開版事業の一環を示すものであろうとされたのであった。

その後、平成一年になって、宗政五十緒龍谷大学教授の調査により、仁和寺に現存する慶長の木活字一式が、この『倭玉篇』に使用されたものと同一と判明し、心蓮院に於ける木活字印刷事業がこうして明かとなったのである。

無論、これは心蓮院という塔頭に於いての事跡であり、仁和寺全体として、当時活字印刷事業にどのように貢献していたのかは明かとなってはいない。しかし、仁和寺に御所蔵される慶長時代の活字版の意義を探ってみるときに、こうした形跡は、当時、仁和寺が印刷文化にとって相当な牽引力を果たしていたのではなかろうかという推測を可能にする。

そこで、このことをも念頭において、以下に、御所蔵の古活字版について、これまでの研究成果を踏まえた解説を加えることとする。

第二章　慶長刊本について

慶長刊本という用語は、あまり熟したものではないということは、『斯道文庫論集』第三十輯（平成八年）「慶長刊論語集解の研究」の冒頭で述べた。この時期はいわゆる古活字版全盛の時代であったが、個々の活字を用いる活字版は、一枚の版木を用いる整版との出版方法の違いが非常に鮮明で、しかも慶長時代の活字版は、一時代を画し、内容が突出して優れ、しかもあっという間に行われなくなった出版物であった為に、特に、古活字版という呼称を与えるのが最も相応しいとされるわけである。しかし、『論語集解』の、この時期の版を比較すると、活字版

と整版との間には、密接な関係があり、活字版だけではその成り立ちを説明することができないということが判った。それ故に敢えて慶長刊本という用語を用いるのであるが、それにしてもこの時期の活字版と整版の間には、版種の問題、異植字の問題、修版の問題など、些か複雑な問題を抱えるので、今、ここで再び、筆者が整理した慶長刊『四書』の状況をまとめてみる。

一　慶長刊趙岐注『孟子』

（『斯道文庫論集』第二十八輯・平成五年）

『孟子』注の版種は、慶長勅版を除いて六種類ある。

①A種aは「関東上総住今関正運刊」の刊記があり毎半葉が七行のもの。

②A種bは慶長十二年以前刊本で、同じく七行本。大文字のAは活字の種類を表し、A種aと同種類の活字を用いていることを表す。こうしたものを同種の活字が植え替えられた改版本とみて、「異植字版」と呼んでいる。

③A種cは慶長十七年以前刊本で、同じく七行本。

④B種はその活字の字様から下村生蔵刊本と推定される。これも同じく七行本。

⑤C種は八行本で、現存する四本のうち、「題辞」（趙岐の序文）の第一・三葉に異版が認められる伝本がある。こうした部分的な改植の場合には「異植字版」と区別して「修・修版・修本」と呼んでいる。

＊異植字版と修版

附言しておかねばならないのは、同種の活字を使って組み替えられた異版、或いは異版の部分の存在によって、その両者の印刷時期の前後をただちに定めることはできない、ということである。誤字脱字の有無等によってその前後を推測することはできてもそれも確たる証拠にはならない。

⑥D種は八行本。

以上である。それぞれ現存するものは数本に過ぎない。内容的には七行本と八行本どうしは密接な関係があるようである。しかし、出版の前後については明確ではない。

なお、この活字版を同じ頃覆刻した整版本の伝本が多数知られているが、これは③A種cの活字版を底本として覆刻したものと目される。

二　慶長刊『論語集解』

（『斯道文庫論集』第三十輯・平成八年）

『論語』の版種は、刊記のある有刊記本と刊記のない無刊記本がある。更に整版本に有刊記本と無刊記本があって、活字版と密接に関わる。

活字版の有刊記本に

①「慶長十四年有傳刊行」の刊記を持つものがあり、これには更に二種類あり、それは、全く同版であるが、刊行者の名前に㊀「洛汭宗與開版」と㊁「洛汭宗甚三版」の名があるものの二種。もっともこの二種の名前は「與開」と「甚三」の二文字の活字を植え替えただけである。

活字版の無刊記本には、

②慶長八年以前刊本

③活字の字様から下村生蔵刊本と思われるもの

の二種類がある。

以上の何れも毎半葉七行十七字である。

整版本は、活字版と版式・字様を全く同じくし、一見して活字版の覆刻本とみることができる。有刊記本は、

①「洛汭要法寺内開版」「正運刊」「慈眼刊」と三行の刊記を有するものがあり、一般に「要法寺版」と呼ばれている。

そして、無刊記本は、この要法寺版を覆刻したと思われる、

②覆要法寺版本

である。この二種類の整版本を綿密に校勘してゆくと、①と②の覆刻状況ははっきりとしてくる。また、活字版との関係を校勘によって探ると、要法寺版は、慶長八年以前刊本の活字版を底本として覆刻したもので、更に、慶長十四年刊本の活字版は、要法寺版を底本として活字翻刻したものであると推定されるのである。要法寺版は、整版ながら、二つの活字版の橋渡しをしたのであって、ここに、当時の出版事情の複雑さを見て取れるのである。この頃の出版活動の遺物を「慶長刊本」と括った理由がここにあるのである。

そして、もう一種、

③乱版（みだればん）

というものが存在する。これは、巻第四から七までの全体の約三分の一が活字版で、それ以外の箇所が①要法寺版となっているもので、活字・整版が入り乱れているので乱版と称するわけである。この版の成立については不明であるが、要法寺版の成

立後、何らかの事情によって、部分的に活字が組まれたものであろうと推測した。

三　慶長刊『大学・中庸章句』

（『斯道文庫論集』第三十二輯・平成十年）

『大学・中庸』はやや複雑である。大きく分けて、『論語』『孟子』と同様に、下村生蔵刊本、今関正運刊本、無刊記本、整版本となるが、そのなかにも更に幾つかに分類され、また、『論・孟』と同時に出されたのか、或いは単行であったのか、等の問題もあり、成り立ちを解明するのは困難である。版式は皆、毎半葉七行十七字であるが、版心等にはそれぞれ異なる点が見られる。その分類を記すと以下のようになる。

①下村生蔵刊本

は『論・孟』と一対の開版であろう。

②今関正運刊本

には、㈠甲種㈡乙種㈢丙種、三種の異版が存在し、それぞれみな「関東上総住今関正運刊」の刊記がある。㈢丙種は慶長十四年刊の『論語』と同種の活字を用いている。

③無刊記本

は、やはり三種の異版が存在し、㈠甲種、『論語』の②慶長八年以前刊本と同種の活字を用いているもの、㈡乙種、版心が双黒魚尾で粗黒口の象鼻が短いという特徴があるもの、㈢丙種、版心が双花口魚尾となっているものに分けられる。

整版本は一種類の版で、版式字様ともに活字版と相似するが、その祖本は同定できない。『中庸』の末尾に「関東上総住今関正運刊」と刊記を有するから、今関版との関係は密接である。

第三章　漢・趙岐注『孟子』について

仁和寺御所蔵の一本は、最善のテキストである下村生蔵刊本で、しかも他の伝本と異版を含んでいる次のようなものである。

孟子十四巻　欠巻三～巻五（公孫丑上下・滕文公上）　漢趙岐注　慶長刊　修版　古活字版（〔下村生蔵〕）

大四冊（河七十一函　六十七～七十）

本書は慶長時代古活字版のうち、最も優雅な木活字を用いた下村生蔵の刊刻になるものと思われる。即ち、B種本に属する

ものである。双辺有界七行十七字。匡郭内縦21.8×横16.1糎。界の幅は2.2糎。版心白口双花口魚尾。中縫は「孟子巻一　丁付」。孟子の古活字版は中世、博士家清原家のテキストを用いたもので、漢の趙岐注本の善本は早く中国に亡び、日本に遺った古活字版が最も優れたテキストであった。その古活字版『孟子』には六種類の版が伝わるが、うち、この下村本が最善である。

現存する下村本は、東洋文庫（三Ａａ二〇）・宮内庁書陵部（四〇一・四二）・尊経閣文庫・大東急記念文庫（二二一・三九・五三）・成簣堂文庫・太宰府天満宮文化研究所（一六九）〈存巻三～八、一二～一四〉・大谷大学図書館（外丙一二七）〈巻三の一・二・五・七葉は修〉・台湾故宮博物院の七本が知られる。

本書は、題辞・巻一・二を同種活字で組み直した（活字を組み直した修改本）もので、本版上梓の過程に於ける貴重な珍品である。ただし、刷り面の様子から、おそらくは、仁和寺本が初印で、他の伝本が改植であろうと思われる。（図一）

江戸時代前中期頃の縹色表紙（縦30.2×横21糎）に、左上に題簽を貼り、「孟子」と墨書する。五針眼訂。各冊の表紙見返しに「仁和寺」の大きな額印を捺す。開版後間もない頃の書き入れ（返点・送仮名・縦点・附訓）が墨書にて経文のみに附される。重量感ある大型本で、当年の雄大な学術志向をよく体現した貴重書である。

更に、③Ａ種ｃ本を底本として覆刻した整版本に次の一本が所蔵される。

孟子十四巻　存巻九～巻十四（万章上～尽心下）　漢趙岐注
慶長刊　二冊（河七十一函　六十五・六十六）

『論語』と同じ古活字版の覆刻版。論語Ａと同じ表紙を用い、同時の改装に係る。『論語』と大きさは異なるので、同時の印刷ではないかも知れない。本文のみに、墨書による慶長頃の訓点（返点・送仮名・縦点・附訓・声点）が附される。「仁和寺／文庫」印記。

第四章　魏・何晏集解『論語』について

『論語』の古活字版は慶長刊本の成立についてさまざまな問題を提起してくれるものであるが、仁和寺所蔵のものは、古活字版を覆刻して、更に別の古活字版の底本となった②覆要法寺

刊本である。それが四本現存している。江戸時代の初期・前期に、漢文講読の基礎本であった『論語』に占める本版の需要が多かったことを示すとともに、仁和寺の学術活動が本版の開版と関係があったかも知れないという可能性を示唆するものである。

A　論語十巻　魏何晏集解　慶長刊　覆刻古活字要法寺版

二冊（河七十一函　六十一・六十二）

慶長時代、一世を風靡した古活字による印刷本のなかで、最も流行した四書（大学・中庸・論語・孟子）は、活字本と同時にそれを版木に覆刻した整版本の需要も多かったようで、その現存本は比較的多い。その整版本で、要法寺内で開板したとする刊記のあるものは所謂要法寺版と称し、十点ほど現存し、刊記の無い無刊記本は二十点ほど現存する。仁和寺所蔵本はそれに加えられるものである。本版は、覆刻ではあるが、貴重本に数えられる。とりわけ、仁和寺所蔵本はこの同版本が四本あり、全く他の所蔵と比べて特異な現存である。おそらく、寺内では江戸時代の初期、相当に『論語』の講読が盛んであったのではなかろうか、と想像される。

濃い栗皮表紙（27.5×19.2糎）は慶長頃のものと推測される。版式は、双辺有界、毎半葉七行十七字で、匡郭内は縦21.2×横15.3糎。版心は、粗黒口双黒魚尾。中縫に「論語幾　丁付」と刻す。経文にのみ開板後間もない訓読（返点・送仮名・縦点・附訓）朱ヲコト点が加えられる。慶長刊本に書き入れられた訓読は一様に清原家の訓を伝えたものであることも当時の受容の特徴である。

表紙見返しに「仁和寺」の大きな額印を捺す。

B　同前

二冊（目録外一・二）

やや淡い栗皮色表紙（27.2×19.5糎）。六一・六二本（A本）より少し時代の降る表紙。「論語上下」と書き外題がある。経文にのみ墨書にて総振り仮名を書き入れる。やはり開板後間もない頃に施された訓点（返点・送仮名・縦点・附訓）も墨にて附す。

表紙見返しに「仁和寺」の大きな額印を捺す。

C　同前

二冊（目録外三・四）

AとBの中間くらいの濃さの栗皮表紙（27.2×19.2糎）。書き外題「論語上下」。また表紙右下に「甲」と朱書。経文・注に朱ヲコト点・附訓・送り仮名、墨の訓点（返点・送仮名・縦点・附訓・音注・校異）を書き入れる。校異は「才本」「疏」「朱」などを用い、欄外には補注などの書き入れを加える。いずれも江戸時代の初期であろう。

印面も清朗な早印である。表紙見返しに「仁和寺」額印を捺す。

D　同前　　合一冊（目録外五）

AとCの中間くらいの濃さの栗皮表紙（26.3×19糎）。上下が裁断されている。総裏打ちを施す。書き入れは無い。

見返しに「仁和寺」額印を捺す。

以上四本は皆同版であるが、C本が早印で書き入れも周密であり、最も佳と言える。

さて、前述した、本版と仁和寺との関わりを少しく想像すると、第五章で述べる『大学』『中庸』の刊行に関わった今関正運であるが、要法寺版の刊記に正運の名が刻されている通り、京都の斯界にあって有力な人物であったことが想定され、仁和寺所蔵の『中庸』に記された「如竹」の跋文に見える「関氏」と何らかの関わりがあると、更に考えを及んで行くときに、江戸時代初期頃に盛んであった仁和寺の儒学需要の活動に、正運は深く関わっていたとみることもできるであろう。本版がそうした潮流のなかで印行され、学僧に流布していったと考えるのも強ち不要の説とも言い切れない。

京洛の読書界がこうした出版活動と一対になっているであろうと思うとき、また、慶長刊本に清原博士家の訓読法を書き入れて学修していた当時の学風の姿が彷彿されるのである。

第五章　宋朱熹章句『大学』『中庸』について

『大学』『中庸』に関しては、とにかく揃えるのが困難で、一対のものなのか、取り合わせたものなのかの区別が難しい。それゆえに、刊記の存在するものから順に目安をつけてゆく。まず、『中庸』がそのとりかかりとなる。

今、その『中庸章句』を見ると、②今関正運刊本の㈠甲種に

相当するものと判断される。前述の如く、今関正運の名前が刊記に記されているものは、三種の版が存在し、それらは字様があい似てはいるものの活字の種類にはやや異なる特徴があるようである。本書も末尾に「関東上総今関正運刊」と刊記があり、甲種に間違いないのだが、巻頭の一行だけが、甲種の他の伝本とは異なり、組み替えられている。

もっとも、この種の伝本の『中庸章句』は、斯道文庫所蔵（九條家旧蔵　高木文庫旧蔵本）と内閣文庫所蔵本（醍醐水本院旧蔵）の二本しか知られず、本書は、組み替え（これも前述同様、何れが先かは断定できない）の存在する新出の伝本である。

更に、本書の末には、慶長十四年（一六〇九）の墨書識語を有し、これが新出の資料となって大きな意味を持つのである。『大学章句』も、他に同版本の存在を確認できない新出本であり、その価値の高さを物語っている。

中庸一巻　宋朱熹章句

慶長十四年以前刊　古活字版（今関正運）

一冊（河七十一函　四十八）

本書は同じく、古活字版で、『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』と四書としてセット発行した今関正運刊行のものである。今関版は幾種かの活字を用いていて版種の識別が非常に困難な版で、四書セットとはいうものの、『大学』・『中庸』と『論語』・『孟子』はそれぞれ別個に販売されたものと思われる。

薄い縹色の後補表紙（27.2×20糎）。見返しに「仁和寺」の額印を捺す。外題は「中庸」と墨書。版式は、双辺有界七行十七字、匡郭内縦21.3×15.1糎、界の幅は2糎。版心は粗黒口、双黒魚尾、中縫に「中庸章句　丁付」を刻す。版心の幅は約2糎。

既述のように『大学』・『中庸』は、甲・乙・丙の三種の版があり、本書は甲の種類に属する。本文が「中庸章句畢」と尾題で終わり、「補音釈」を一葉附し、末尾第四十一丁の七行目右側に小字で「関東上総住今関正運刊」と刊記を刻す。甲は、斯道文庫（『大学』・『中庸』）・内閣文庫（『大学』・『中庸』）・東京大学総合図書館（『大学』）・成簣堂文庫（『大学』）のみの現存で、要するに『中庸』は、斯道文庫と内閣文庫の所蔵が知られるだけである。斯道文庫本は九条家旧蔵のもので、本版の由来の奥義を知りうる。

ただし、斯道文庫本と比較すると、巻首、「中庸（中者不偏

不倚無過不及之名庸平常也）　朱熹章句」（括弧内は小字双行）の首一行が匡郭上部から低一格となっており、斯道文庫本は匡郭から空格無しで始まる。活字やその組方は全く同じであるから、おそらくは、最初に低一格として組んだが、本文の始まりであるから、空格無しとして、全体に一字繰り上げたものと想像される。この一行以外は全て同版であるから、同時の印刷に係り、一部ないし二部刷って、ここに気づき、あわてて一格を上げ直したものであろう。その意味では、仁和寺本の存在は古活字版の工程を伝える珍しいもので、斯道文庫本の方を修刻とするべきなのであろう。（図二）

また、本書には、後表紙の前にある副葉に、慶長十四年の如竹による墨書奥書が記され、次のような内容である。（図三）

「関氏勝吉者志学之年而窺四書雖不敏幸而知當聖道勉急未学吾謂学之予／感志餘以清家的本此章句約令加朱点與退而思之無力雖恥不及写本之九牛之一毛／兼諸難辞故令首尾汗顔幾／于時慶長十四歴（ママ）春三月中澣六　　西山仁和桑門　如竹」

この奥書の存在によって、本書が慶長十四年より以前に印刷されていたことがはっきりと証明されるわけである。

が、ここで注目されるのは「関氏」。「関氏勝吉者・・」とあることで、それが今関正運であるならば、この人の事跡の一端を知りうる新出資料となるわけである。

開板後間もない頃の書き入れ、墨書の返点・送仮名・縦点・附訓、また朱のヲコト点が附される。『斯道文庫論集』第三十二輯に翻字した東洋文庫蔵清原秀雄旧蔵本に書き入れた訓読法と全く同じ、即ち清原家の家訓を伝える点本である。

＊如竹の奥書について

この内容は、「関氏は三十の年になってから『四書』を学んだが、その志を嘉して清原家の博士家点本によって点を写し取ってあげようと約した。力及ばず辞退するべきであったが、それもかなわず、ここに何とか移点することができた。」というものである。

西山仁和桑門としているので、如竹は仁和寺の僧侶であるわけだが、仁和寺にそうした人物の伝はないという。また、如竹と言えば、泊如竹（とまり　じょちく・一五七〇～一六五五・屋久島の出身）という慶長時代の文之玄昌（一五五五～一六二〇・日向飫肥の人・南浦文之）の門下、如竹散人を想起する。この如竹は、薩摩で新しい『四書』の和点を唱導した桂庵玄樹

（一四二七～一五〇八・周防の人）に連なる文之玄昌の点本・文之点を伝えた人で、寛永時代に流行した『大魁四書集注』の和訓本出版に大いなる力を発揮したのであった。京都の本能寺や薩摩鹿児島の正興寺で活躍したと伝えられ、慶長十年（一六〇五）に文之玄昌の門に入り、儒者を兼ねた。従って、仁和寺の如竹とは時代や事跡がよく通じ合っている。

すなわち、この如竹散人と本書の奥書主・如竹が関連するのか否か、定かではないが、既に、この仁和寺本『中庸章句』を紹介している大江文城『本邦四書訓点並に注解の史的研究』（昭和十年・関書院）には、この奥書を載せて、書写主である仁和寺の如竹については特に言及していない。

大学一巻　宋朱熹章句　慶長刊　古活字（今関正運か）

一冊（河七十一函　四十五）

本書も古活字版『大学章句』の新出本である。今関正運の刊行による活字版と思われるが、末尾に今関正運の刊記は無い。ただ、所用の活字の字様が、下村生蔵刊本の活字とは全く違い、今関版のものと似通っているので、今関正運が用いている活字のグループによる植字にかかるとみて間違いないと判断されるのである。しかし、同版本は発見されていない。

前述の如く、『大学』・『中庸』の②今関正運刊本には、㈠甲種・㈡乙種・㈢丙種があり、『大学』が現存するのは、㈠甲種・㈢丙種のみで、甲種は、斯道文庫（『大学』・『中庸』）、内閣文庫（『大学』・『中庸』）、東京大学総合図書館（『大学』）、成簀堂文庫（お茶の水図書館・『大学』）に現存する。前項に挙げた仁和寺所蔵の『中庸章句』は、斯道文庫蔵『中庸章句』と同版であるから、『大学』・『中庸』とセット出版されたものであるが、ここに挙げる本版はそのセットのうちの『大学章句』とも版が違うわけで、㈠甲種本と言うことはできないのである。更に、㈢丙種は大東急記念文庫、小汀利得氏蔵本のみ知られるが、これらとも異版である。

また、③無刊記本のなかの㈠甲種㈡乙種㈢丙種は、やはり本版とは、活字の種類を異にするか、あるいは版式が異なるかであって、本版はそのいずれとも同じではない。

従って、本版をここに分類するならば、新たに②今関正運刊本のうちの㈣丁種本として設けなければならない新出の貴重本であると言えよう。分類としては、㈣丁種となるが、版式字様

からすれば、㈡乙種に準じる、つまり㈠甲種と同様の活字による異植字版と考えられるであろう。（図四）

付け加えるならば、こうした未見の版種が伝わることから、今関正運の出版活動と仁和寺の読習活動とが何らかの関わりを持つのではないかとも想像を逞しくするのである。

本版には、江戸時代初期ころに補われたと思われる茶色の表紙（26.5×20.2糎）を用い、そこに空押しの草花紋が見られ、「大学」と古い書き外題がある。見返しには、「仁和寺」の大きな額印が捺される。

版式は、四周双辺有界七行十七字、匡郭内は縦21.3×横15.1糎。版心は粗黒口、双黒魚尾。中縫に「大学章句　丁付」を刻す。版心の幅は1.5糎。

書き入れは、開板後間もないころに施された墨の返点・送仮名・縦点・附訓（経文のみ、首のみ注文にも存す）、朱のヲコト点を施す。これらの書き入れは、前記の『中庸章句』とは別人の手によるものである。その訓法は、『斯道文庫論集』第三十二輯に翻字した台北故宮博物院現蔵楊守敬観海堂旧蔵下村生蔵刊本に書き入れられた訓読法と全く同じ、即ち清原家の家訓を伝える点本である。

附章　慶長七年清原秀賢刊『古文孝経』について

ここに、慶長期、古活字版の出版活動に大きな示唆を与えてくれる『古文孝経』が仁和寺に所蔵されるので、ここに紹介しておかなければならない。

そもそも『古文孝経』の慶長刊本には、勅版を除けば、八行十五字、八行十七字、八行十八字の三版が知られ、そのうち、八行十七字本は、慶長七年（一六〇二）の、博士清原秀賢（一五七五～一六一四）による跋文を備えているもので、東洋文庫・高野山宝亀院に所在が知られ、更に、東北大学附属図書館・京都大学附属図書館には、同版本ながら、その跋文を欠いているものが存在する（東北大本はこの跋を東洋文庫本によって補写している）。

この八行十七字本の『古文孝経』が、大きな意味を持つことは『慶長刊論語集解の研究』（『斯道文庫論集』第三十輯・平成八年）のなかで詳細に述べたが、本版のテキストの成り立ち、活字の種類、跋文の内容が、『論語集解』の解明に資するところが多いのである。

すなわち、清原秀賢（一五七五～一六一四）が述べるように慶長刊本『古文孝経』は、清原家の家本を底本にしているのであり、本版の活字は、『論語集解』の②慶長八年以前刊本と同じグループの活字を用いていること、そして、跋文に言うように、これらの慶長刊本の出版を企図していた出版人が存在していたこと、があきらかとなるのである。そこで、『論語集解』に出てくる「有傳」「宗與」「宗甚三」、そして『大学』『中庸』に出てくる「今関正運」などの人士は、清原家とも関連していたのではないかと推測することができるのではないか。

跋文の内容を再度、ここに載録すると、

或るひと一日きたりて予に謂ひて曰く、孝経は百行のもとたるの書にあらずや。今の世の事を好むものは、多くもって梓に費やすと雖も、工いまだ此の書に及ばざるは惜しいかな。因りて刊駸の労を貰（か）りて、幼学の几案に備えんと欲するなりと。予、その志に感じて遂に累代の的本を出してこれを借し与へ、予もまた時々校訂を加ふるものなり。慶長壬寅の八月壬子、明経儒清原秀賢誌す

というものである。（図五）

この跋文のみは、本文とは全く違った活字を用い、それも秀賢の筆跡に非常によく似たもので、この第二十六葉目が別種活字で組まれ、右葉の「古文孝経終」の尾題とともに本文とは異種活字である。

いずれにしても、こうした重要な手がかりになる伝本が遺る仁和寺の、慶長期古活字版出版活動に与った影響力を思わずにはいられない。

清原秀賢は舟橋秀賢として舟橋家を創始する。後陽成天皇の侍読。『慶長日件録』を著す。

古文孝経一巻　旧題漢孔安国伝　慶長七年刊　古活字版

一冊（河七十一函　四十三）

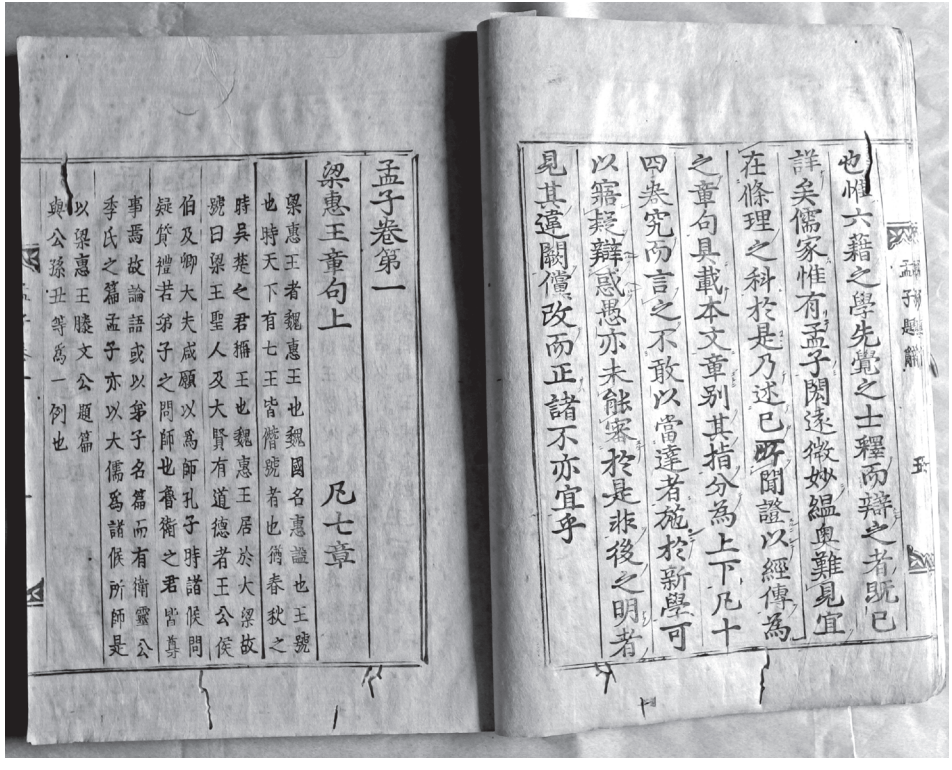
『孝経』は、古文・今文といったテキスト上の問題から、古文孝経は中国では早くから亡び、日本にのみ伝わった。室町時代以前の古写本は相当数遺り、その大部分は清原博士家のテキストで、古活字版もその博士家本をもとに出版したものであったことは前述した。本書には清原秀賢（一五七五～一六一四）の慶長七年の刊語跋があり、その年の刊本と考えられる。この有刊記本は、他に東洋文庫・高野山宝亀院に所蔵が知られるの

みである。無刊記本も数本が伝わるが、『孝経』の古活字版は版種が多いわりには伝本が多くはない。

本書は栗皮表紙（26.3×19糎）で印刷時の装訂に近く、版式は、四周双辺有界八行十七字、匡郭内縦21.5×15.5糎。界の幅は約2糎。版心は粗黒口双黒魚尾。中縫に「孝経　丁付」。尾題は「古文孝経終」とあり、この尾題は最終丁、第二十六丁の第二行目のあり、その裏丁に、無界で清原秀賢の跋文六行を刻す。そしてこの丁の活字は、本文とは別種のものを用いていることも前述の通りである。

「仁和寺（陰刻）／文庫（陽刻）」の印記がある。また、他に大型の円印と壺型印が、それぞれ首丁と末丁に捺される。印文は不明。印刷間もない頃の朱のヲコト点と墨の訓点（返点・送仮名・縦点・附訓・声点）を第十六丁まで加える。その点は清家点である。

この『古文孝経』の活字が、『論語集解』の慶長八年以前刊本のものと同類で、その『論語集解』の整版、要法寺版はこの慶長八年以前刊本に拠って覆刻開版したものであることが証されている。そして、その要法寺版が正運（今関正運）を介して出版されていること、更に、その要法寺版をもとに、慶長十四年に有傳によって活字版が新たに組まれていること、こうした事実を連携すると、当時の京洛の出版事情が見えてくるような気がする。従って、ここに仁和寺が深く関わっていたのではないだろうかとする前述の推測も、強ち附会として捨て去ることもできないであろう。



孟子題辭　五

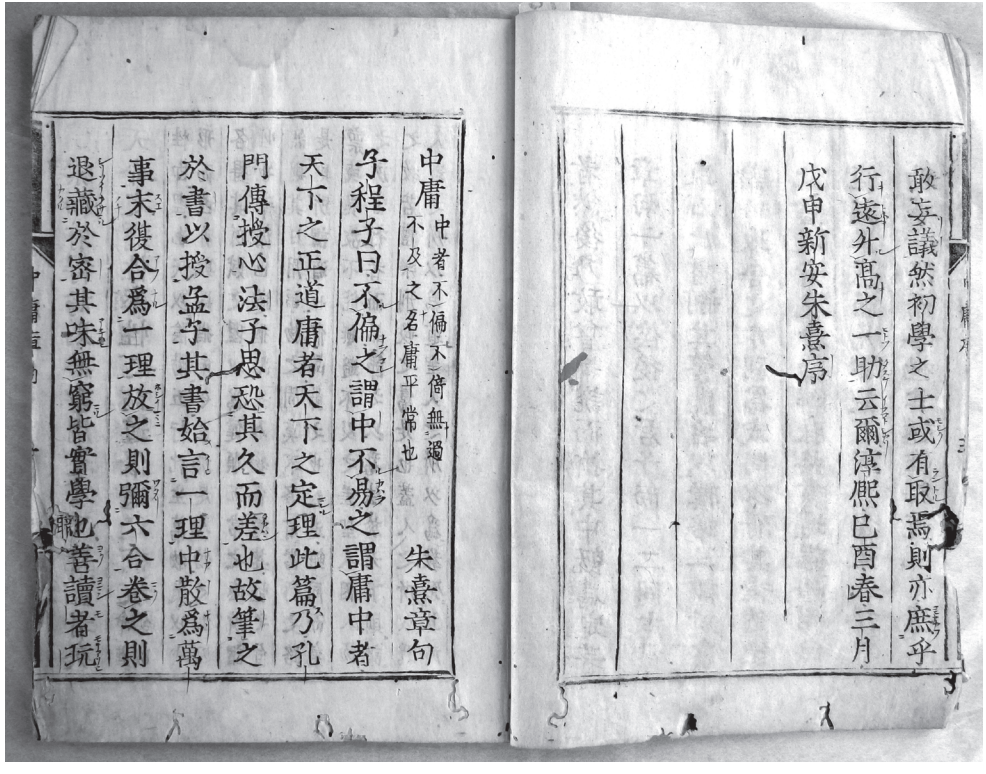
也惟六籍之學先覺之士釋而辯之者既已詳矣儒家惟有孟子閑遠微妙緼奥難見宜在條理之科於是乃述已所聞證以經傳為之章句具載本文章別其指分為上下凡十四卷究而言之不敢以當達者施於新學可以寤疑辯惑愚亦未能審於是非後之明者見其違闕儻改而正諸不亦宜乎

孟子卷第一

梁惠王章句上　凡七章

梁惠王者魏惠王也魏國名惠謚也王號也時天下有七王皆僭號者也循春秋之時吳楚之君稱王也魏惠王居於大梁故號曰梁王聖人及大賢有道德者王公侯伯及卿大夫咸願以為師孔子時諸侯問疑贊禮若弟子之問師也魯衛之君皆尊事焉故論語或以弟子名篇而有衛靈公季氏之篇孟子亦以大儒為諸侯所師是以梁惠王滕文公題篇與公孫丑等為一例也

図一、古活字版『孟子』（河七十一函　六十七～七十）巻一巻頭

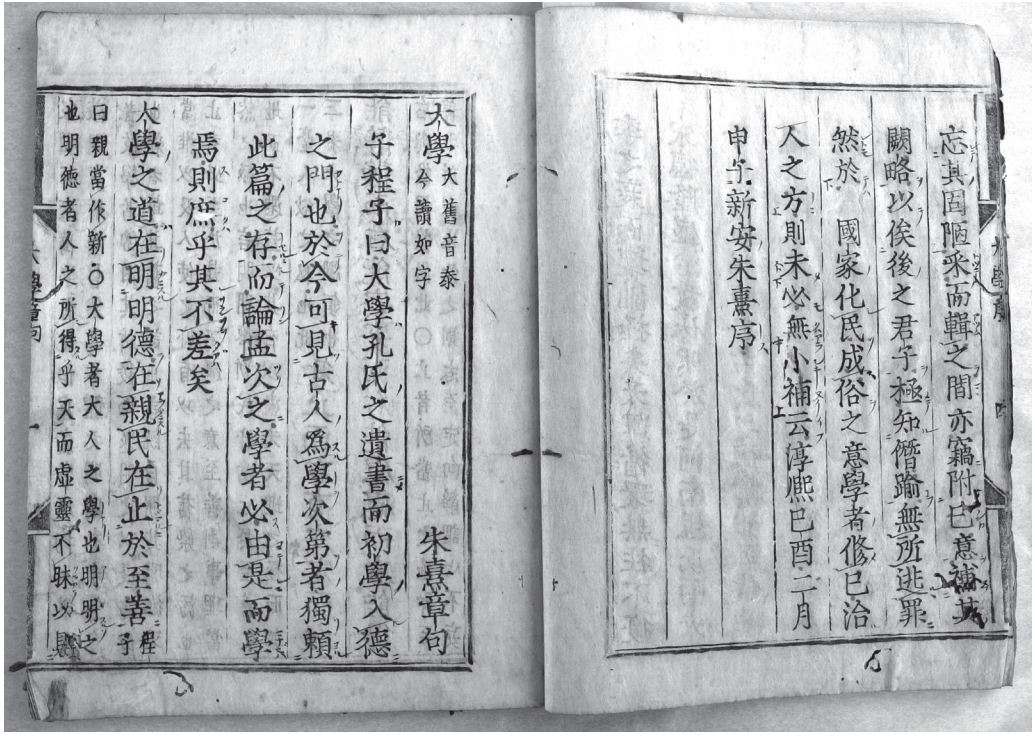


敢妄議然初學之士或有取焉則亦庶乎
行遠升高之一助云爾淳熙己酉春三月
戊申新安朱熹序

中庸中者不偏不倚無過不及之名庸平常也　朱熹章句
子程子曰不偏之謂中不易之謂庸中者
天下之正道庸者天下之定理此篇乃孔
門傳授心法子思恐其久而差也故筆之
於書以授孟子其書始言一理中散爲萬
事末復合爲一理放之則彌六合卷之則
退藏於密其味無窮皆實學也善讀者玩

図二、古活字版『中庸』（河七十一函　四十八）巻頭

図三、古活字版『中庸』（河七十一函　四十八）巻末識語

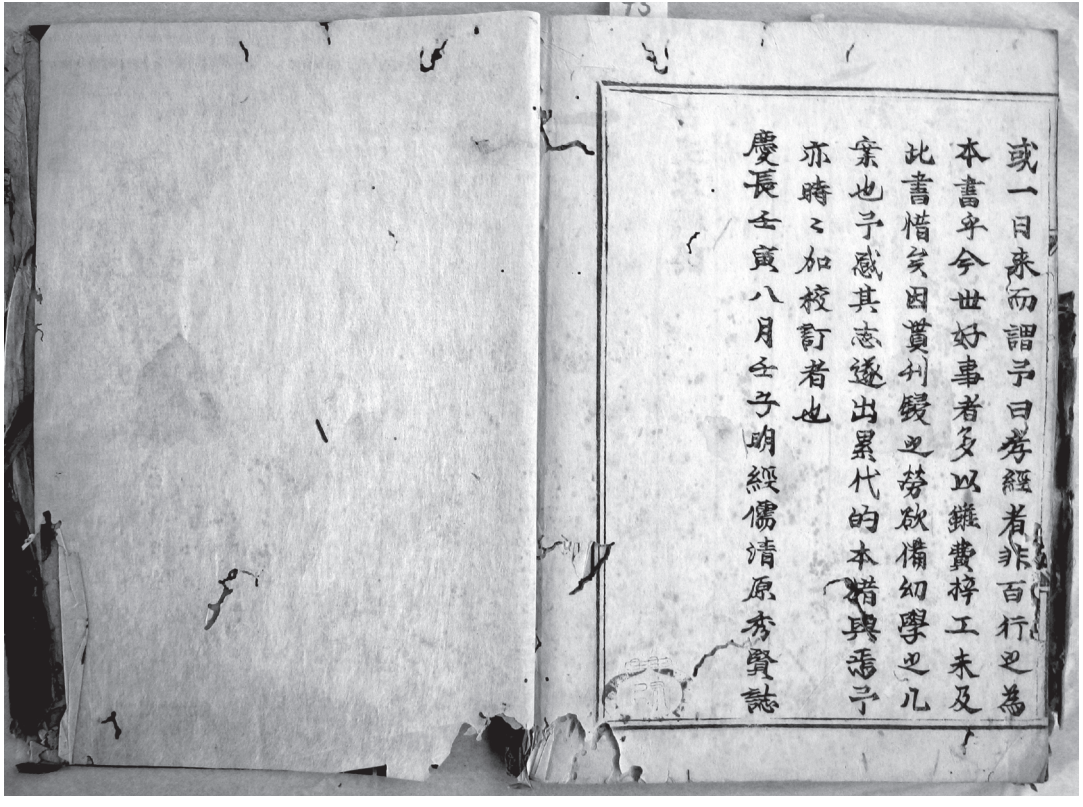


忘其固陋采而輯之間亦竊附己意補其
闕略以俟後之君子極知僭踰無所逃罪
然於國家化民成俗之意學者修己治
人之方則未必無小補云淳熙己酉二月
甲子新安朱熹序

大學 大舊音泰 今讀如字　朱熹章句

子程子曰大學孔氏之遺書而初學入德
之門也於今可見古人為學次第者獨賴
此篇之存而論孟次之學者必由是而學
焉則庶乎其不差矣

大學之道在明明德在親民在止於至善 程子
曰親當作新○大學者大人之學也明明之
也明德者人之所得乎天而虛靈不昧以具



或一日來而謂予曰孝經者非百行之為
本書乎今世好事者多以雖費梓工未及
此書惜矣因翼刊鋟之勞欲備幼學之几
案也予感其志遂出累代的本猶與焉予
亦時〻加校訂者也
慶長壬寅八月壬子明經儒清原秀賢誌

図五、古活字版『孝経』（河七十一函　四十三）巻末刊語